

「白杖」に伝わる人の「優しさ」と「残酷さ」

— 「差別と排除の関係史」考

村田 邦夫

1. はじめに

本日の私の最終講義でお話ししたいことは、私たちがこれまでたどってきた「道」が差別と排除の関係の中でつくられてきたというただその一点です。

私たちは、それにもかかわらず、そうした差別と排除の関係の全体像に目を向けることに代えて、例えば「健常者」対「障害者」、「発達障害」対「発達健常」、「先進国」対「後進国」、「文明」対「野蛮」、「宗主国のイギリス」対「植民地のインド」、「白人至上主義者」対「その反対者」、あるいはまた「西側陣営」対「東側陣営」、「米国」対「中国」、「米国」対「北朝鮮」、「日本」対「中国」、「日本」対「北朝鮮」、「キリスト教徒」対「イスラム教徒」、さらにまた「r (資本収益による所得)」対「g (給与による所得)」、「1%」対「99%」、「富める者」対「貧しき者」、「(暴走する)資本主義」対「民主主義 (を取り戻せ)」、「自由貿易」対「保護貿易」、「現実主義」対「理想主義」、「戦争 (暴力)」対「平和」、「グローバリズム」対「ナショナリズム」、「自由主義」対「帝国主義」、「(自由)民主主義」対「帝国主義」、「民主主義体制」対「非民主主義体制」、「正常な道」対「不正常な道」というように、二項対立的に捉えてしまい、それぞれの対 (グループ) の片方ずつがあたかも一枚岩的もしくは自己完結的なものとして存在するかのように静止的に理解してきた、あるいは、理解しすぎてきたのではないだろうか。

換言すれば、表面的には相互に差別し排除するように思われる両者がそれぞれ対立、敵対する動きを見せながらも、それ以上にむしろ相互に利用し、支え合う形で関係し合いながら、「一つの差別と排除の関係から成るセカイ」をつくりあげてきたという理解からは、ほど遠い地点にとどまっていたのではあるまいか。私のこれまでの研究はそうした観点からの批判的仮説を論述してきたと要約できる。

2. 「差別と排除の関係」からつくられてきた「道」

白杖を手に歩行訓練をした際に感じる差別と排除の関係からつくられてきた「道」。→健常者も障害者も歩く道なのに、健常者が中心となり建設されてきた道。

それは国家の建設においても同じ。多数派を構成する民族が中心となり、少数派の民族を差別、排除しながら国家建設の道がつくられてきた。

国際社会も同じ仕組み。先進国も途上国も等しく国際社会を構成しているのに、先進国、もしくは「文明」が中心となつてつくられてきた道。→近代化のたどる道は、すべての構成員が一堂に会してつくられたわけではなかった。戦後の「日本」と「日本人」は国際社会を憲法前文から学習したが、その中身を真剣には考えないできたのではあるまいか。

付言すれば、「日本は唯一の被爆国」と私たちはよく言うのだが、その当時の「日本」は、なお戦争中の日本であり、「大日本帝国」であったのではあるまいか。正確には、「大日本帝国を建設していた日本が被曝した」、また被曝したのは「日本人」だけではなかった。→同時にその当時のアメリカはアメリカ帝国を建設していたから、アメリカ帝国としての米国は「唯一の原爆投下国」となる。この二つは「セット」として語られなければ何もわからないはずなのだ。

これらの「道」は相互に重なり、差別と排除の関係を強固にしてきたのではない。→日常生活の次元と国家と国際社会における活動の次元が一筋の糸に連なる関係をなす。

21世紀の今、首相さえも自由、民主主義、人権、法の支配、平和といった「普遍的価値」を支持する立場を表明。普遍的価値や「普遍主義」と、差別と排除の関係の中でつくり出されてきた「道」とは、相矛盾するものではなかったのではあるまいか。→普遍的価値の実現はいかなる仕組みの中でつくり出されたのか。→拙著『21世紀の「日本」と「日本人」と「普遍主義」—「平和な民主主義」社会の実現のために「勝ち続けなきゃならない」世界・セカイとそこでの戦争・センソウ—』¹ →その含意は、自由、民主主義、人権、平和と戦争とは対立していない、矛盾しない、恐ろしい関係を構成しているとの主張。平和と暴力も対立、矛盾するものではない。この残酷極まるセカイを支えるのが普遍主義なのだ。アジア的価値を主張する立場を含む「文化相対主義」もそのセカイがつくり出したのではあるまいか。

¹ 図式化したものを、末尾に別途、参考資料として付す。

3. 私のいう「セカイ」とは

私たちは「自己実現」のために「衣食足りて礼節を知る」営為の実現を目指している。それは国家も同様。国際社会もまた同様。「自分らしく生きたい」と個人が望むように、国家もそう欲する。国際社会もまた、その「らしく」を求める。しかし、個人も国家もすべてがその自己実現を果たすことができない。そうしたセカイがつくり出されてきた。まさに大航海時代から今日にかけて。国際社会はそのためにすべての構成員が自己実現できないままにある。

しかしここで厄介な問題が出てくる。自己実現を目指す自己はその自己の生存、存続（すなわち自立である）ができないならば、自己実現云々の話も無理な相談となる。つまり、自己実現のためには、自己を生存させ存続させる「力」、もしくは、自己決定権を可能とさせる「パワー」が大前提とならざるを得ない。中途視覚障害者となった私はこの点を以前に増して考えるようになった。私自身を「カード」として有効に使えるかどうかは私の自己生存、存続のカギ。途上国に資源があるかないかはその生存、存続にとって重要。資源を「カード」に使えるかどうかは死活問題。自己の生存、存続のためにより強い力を蓄えていく営為を前提とした自己実現における力の「カクサ」を求めて自己生存、自己実現のための関係が差別と排除の関係を創り出していく。先進国と途上国の関係は、自己生存、存続をめぐる力のカクサと自己実現をめぐる力の「カクサ」の相互に密接した関係から成る。

この自己生存、存続（自己決定権）の関係を「親分—子分」の関係から成る「覇権システム」として位置づけた。そしてこの覇権国を中心とした親分たちが自分たちに都合の良い「衣食足りて（衣食足りず）」の営為を実現する空間を「資本主義システム」として位置づけなおした。同時に、そうした親分たちが自らに有利となる「衣食足りて」の営為を子分たちとの間でつくり出していく関係を正当化、合法化する「礼節を知る（知らず）」の営為の仕組みを「民主主義システム」と位置付けた。

4. 今、どの地点に位置しているか

最初のくだりで指摘した二項対立的出来事は、こうした差別と排除の関係から成り三重のシステムの「道」の中に組み込まれていたのだから、やはりシステムの全体像と関連付けて考察しない限り、私たち自身が今、「道」のどの地点（段階）に位置しているかを確認することは難しいのではあるまいか。当然ながら、私たちが選択すべき進路さえわからないはずである。非常に厄介極まりない地点に「日本」と「日本人」は立たされているのである。→自己決定権の能力が相当に低いレベルの日本が、「集団的自衛権」や「個別的自衛権」、さらに、「消極的平和」ではなく「積極的平和」を目指せ、云々の議論に傾いているが、日本は米国の「属国」では

なかったのか。憲法改正、護憲云々の前に、自己の生存、存続できる力が果たして日本と日本人に残されているかを問うべきではないのか。

この差別と排除の関係から構成されるシステムは、それ自身が「バリア」となって構成されている。覇権システムも、資本主義システムも、民主主義システムも、そこに組み込まれた者同士をバリア関係の中に組み込んでいく。その意味では、私たち自身も、すなわちそこには健常者も障害者も、先進国に住む人々も、後進国に暮らす者も、1%の人々も、残りの99%の人たちも、資本収益による所得を得ている者も、給与生活者も、差別と排除の関係を支えるバリアとしての存在となっている。このバリアとその関係は相当に強力でシステム構成員にそのバリアの全体像を見えにくくしているし、私たちはいつも二項対立的図式の前で立ち尽くすばかりである。→「差別し排除してきた側」から「差別され排除される側」に今や位置している。→1970年代はそうした差別と排除の関係史の「分水嶺」を隠している。

最後に一言

しかしながら、私自身は相当に前向きに生きようとしている。中途視覚障害者の私には、健常者の時よりも、もっと社会にかかわって、身の回りの道路や点字ブロックや音響信号機の設置の在り方や、駅のホームの問題点を少なくとも以前よりはつきりと確認できるのだから、社会に対してなにがしかの発信を続けることは可能である。仲間を少しずつ増やして、「バリア・フリーの会」の運動を進めていきたい。

最後になりましたが、国際関係学科の同僚でありました大石高志先生には、私の最終講義開催にあたりポスターの作成から参加者への呼びかけ、学内の講義案内の掲示、またその間における本学事務局や外国学研究所との調整、そして最終講義での進行役と、何から何までお手配、ご尽力いただきました。そしてこの『神戸外大論叢』への寄稿を熱心に進めてくださったことにも、大石先生の優しさを改めて感じた次第です。ここに先生に対する私の謝意を表しておきます。ありがとうございました。

参考資料

[図式 I] (ア)、[図式 I] (イ)、[図式 II]

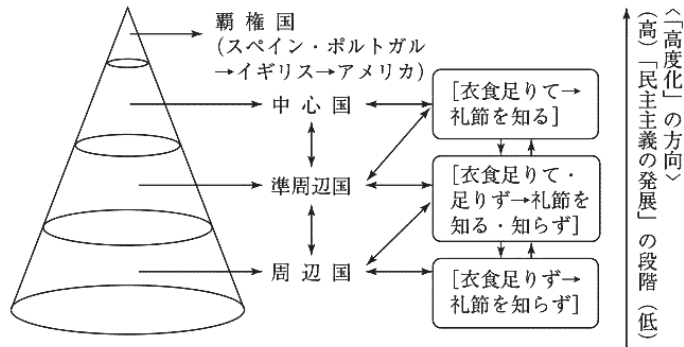
出所：拙著『21世紀の「日本」と「日本人」と「普遍主義」—〈「平和な民主主義」社会の実現のために「勝ち続けなきゃならない」世界・セカイとそこでの戦争・センソウ〉—』晃洋書房2014年、88—91頁。

〈1970年代まで〉(あるいは、1970年代半ばまで)

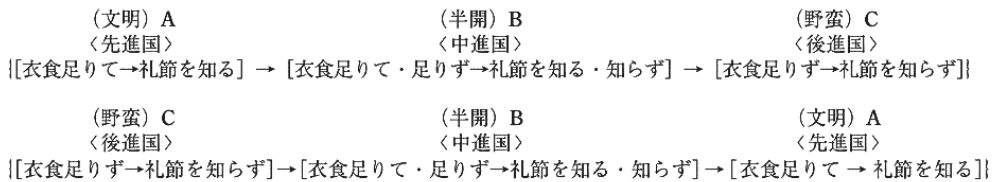
[図式 I] (ア) (「普遍主義」をつくり出し、支えてきた「覇権システム」とその「秩序」の下に織り成されてきた「衣食足りて(足りず) 礼節を知る(知らず)」の営為の「関係(史)」の仕組み)

「衣食足りて(足りず)」と
「礼節を知る(知らず)」との
関係により織成された [セカイ]

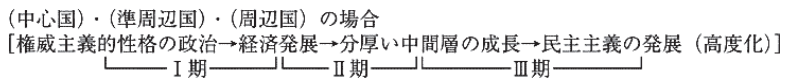
(覇権システムの構造)



〈図式 I〉 (ア) 〈1970年代半ばまでの「普遍主義」の「秩序」〉(共時態モデル)

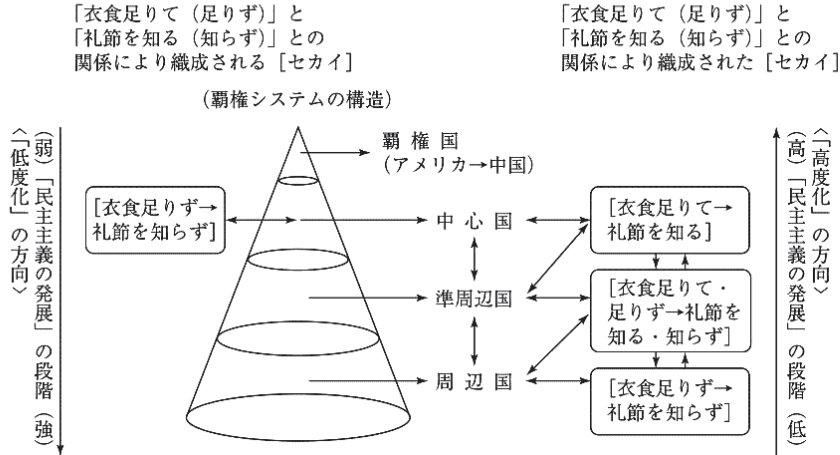


〈図式 II〉 (ウ) 〈1970年代半ばまでの「普遍主義」の「秩序」(図式 I (ア))
の下での「民主化」の方向〉

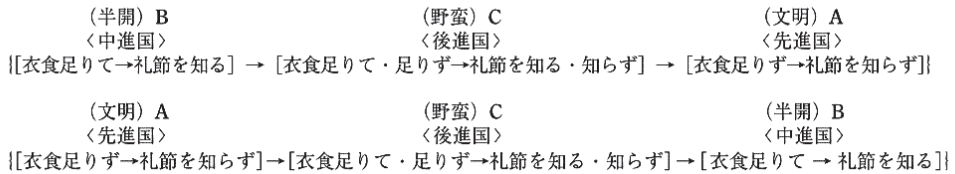


〈1970年代以降〉（あるいは、1970年代半ば以降）

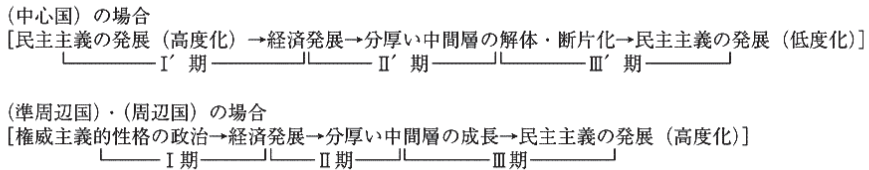
〔図式 I〕（イ）〔「普遍主義」をつくり出し、支えてきた「覇権システム」とその「秩序」の下に織り成されてきた「衣食足りて（足りず）礼節を知る（知らず）」の営為の「関係（史）」の仕組み〕

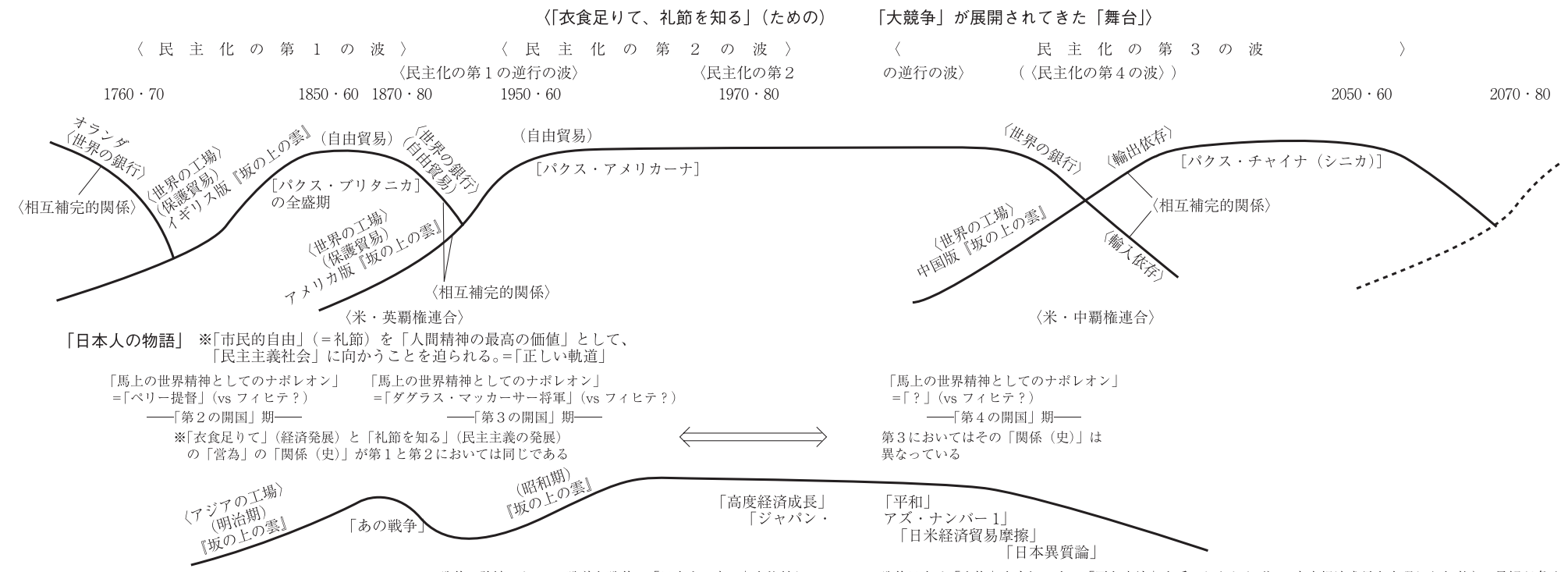
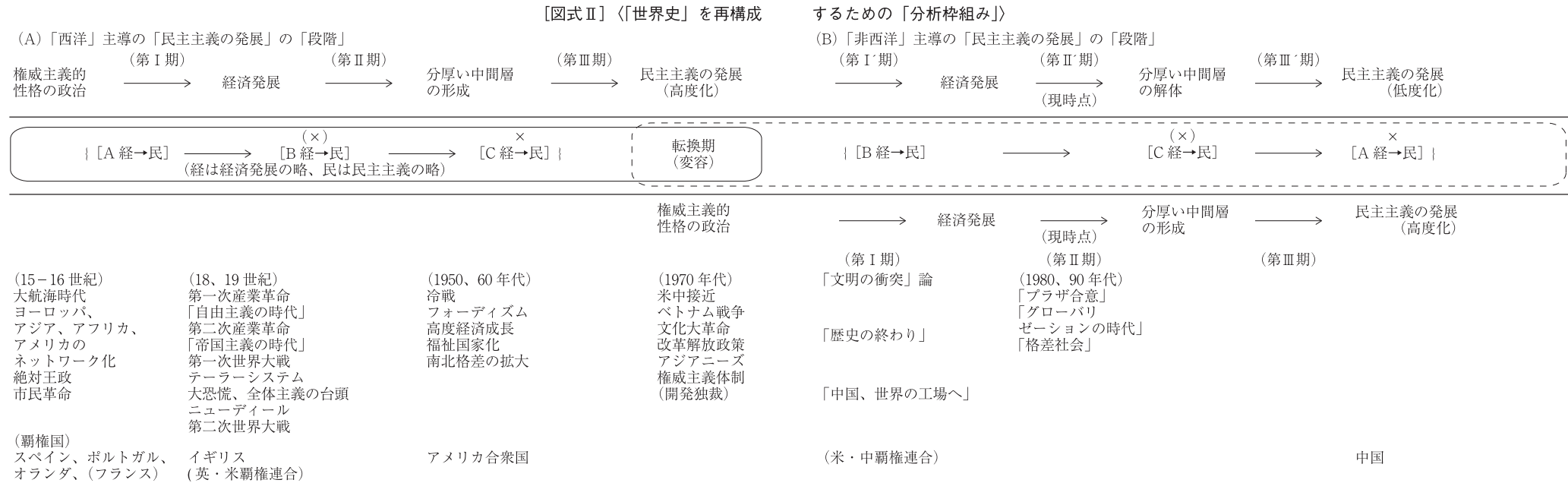


〈図式 I〉（イ）〈1970年代以降あるいは1970年代半ば以降の「普遍主義」の「秩序」〉（共時態モデル）



〈図式 II〉（エ）〈1970年代以降あるいは1970年代半ば以降の「普遍主義」の秩序（図式 I（イ））の下での「民主化」の方向〉





(図式の補足説明)

筆者の図式Ⅱから分かるのは、S・ハンチントンの「民主化の第1の波」は、オランダからイギリスへと覇権のバトンが移って、行する丁度いわれる両戦間期の時期が「民主化の第1の逆行(退行)」の時期である。そしてパクス・アメリカーナの全盛期からともに「民主化の第2に逆行(退行)」の時期が見られるが、やがて中国が世界の工場を経験して覇権国として台頭し始める流れイナへと至る動きと民主化の歩みが重なっていると筆者は理解している。

そこに筆者の図式Ⅰとの関連で先の民主化の歩みを見ると、民主化の第1、第2の波は、{ [A]→(×) [B]→× [C] } で描と筆者は理解している。いずれにしてもパクス・アメリカーナからパクス・チャイナへと確固とした覇権システムが形成されるしかし、筆者が特に力説しておきたいのは、民主化や民主主義の実現に際して、最も重要なファクターは、覇権国と覇権システムが形成されるということである。この点が大事なのだが、ほとんど社会科学の研究者はこうした関連性に気が付かないまま

パクス・ブリタニカの全盛期から次第に後退期を迎える時期と重なっていることが分かる。それからパクス・アメリカーナに移少し後退していく間が、「民主化の第2の波」と呼ばれる時期と重なっていることが分かる。その後のアメリカの覇権の後退と重なるように、「民主化の第3の波」あるいは「民主化の第4の波」として位置づけられる時期となる。ここでもパクス・チャイナで起きているのに対して、民主化の第3、第4の波は、{ [B]→(×) [C]→× [A] } で描かれるセカイで導かれている、までは、民主化の波も第1、第2の逆行の波と呼ばれる時期があったように、なお当分は不安定な時期が続くであろう。テムの存在だと言うことである。民主化の歩みが続く限り、必ず覇権国は登場すると同時に、その覇権国を頂点とした覇権システムである。